

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 鈴木 智彦

論 文 題 目

Long-Term Prognostic Predictors of Esophageal Squamous Cell Carcinoma Potentially Indicated for Endoscopic Submucosal Dissection

(内視鏡的粘膜下層剥離術の適応と考えられる食道扁平上皮癌の長期予後予測因子)

論文審査担当者 名古屋大学教授

主 査 委員 小寺 泰弘  
名古屋大学教授

委員 江畑 智希  
名古屋大学教授

委員 葛谷 雅文  
名古屋大学准教授

指導教員 石上 雅敏

## 論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

今回、2007年1月から2017年12月までに、内視鏡的粘膜下層剝離術の適応と考えられる表在型食道扁平上皮癌と診断された患者 241 例を対象として、後方視的に予後予測因子を検討した。観察期間の中央値は 56 か月で、観察期間中の死亡者数は 45 例であった。他病死は 35 例であり、27 例は他臓器癌が原因であった。COX 回帰分析による多変量解析の結果、併存疾患の指標である Charlson Comorbidity Index (CCI) と栄養状態の指標である Prognostic Nutritional Index (PNI) が予後予測因子と同定された。ハザード比を基に、CCI と PNI を点数化したスコア分類を作成し、スコア化により予後が層別化された。特に CCI $\geq$ 6 の群は、3 年 5 年全生存率が約 10% と著明に低く、治療方針として経過観察の可能性が示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 現在、名古屋大学を含めた多施設前向き共同研究が症例集積段階で、今後長期予後予測因子を含めて検討予定であり、その結果によって、ガイドラインの変更および今後の治療基準が変わってくるものと考えられる。
2. 今回は ESD 適応の表在型食道扁平上皮癌を有するという母集団で評価したため、食道癌に対する点数は CCI に含めていない。Charlson らの原著でも、testing stage で乳癌治療後の方に validation study を施行しており、その際に乳癌の既往は点数に含めていなかった。
3. CCI は併存疾患の指標であり、調整因子に用いられることもあるが、疾患の長期予後予測因子として近年報告されることも多い。10 年以内でも、早期胃癌や膵癌、悪性リンパ腫、間質性肺炎などの予後予測因子として報告されており、多岐にわたっている。
4. 胃癌での死亡は 2 例あり、2 例とも同時発見の食道癌と胃癌の重複癌である。1 例は発見時にすでに胃癌による腹膜播種を認めており、食道癌は経過観察となった。もう 1 例は、進行胃癌で術前化学療法を施行したが、骨転移が見つかり一旦食道の治療は延期となった症例で、その後の内視鏡検査で、胃癌に対する化学療法が食道癌にも効果を示しており、完全奏功と判断された。

本研究は、内視鏡治療が可能な表在型食道扁平上皮癌に対する治療方針を決定する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	鈴木 智彦
試験担当者	主査	小寺 泰弘	副査 <sub>1</sub>	江畑 智希
	副査 <sub>2</sub>	葛谷 雅文	指導教員	石上 雅敏
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 今後の臨床応用について</li><li>2. Chalsom Comorbidity Index (CCI) に食道癌が含まれているかについて</li><li>3. CCIの解析時の役割について</li><li>4. 他病死における胃癌での死亡について</li></ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、消化器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				